

# 川村秀忠先生のご定年に寄せて

## —憧れの研究者としての生き方—

星 山 麻 木

川村先生が長年ご尽力された研究者としてのご任務に一区切りされることに際し、長年のご功勞に敬意を表すると共に深く感謝いたします。

川村先生は障害児教育（現在の特別支援教育）の分野におけるご重鎮であられ、この分野を学ぶ者にとって、お名前を知らぬ方はいないほど、ご高名な研究者でいらっしゃいます。特に、現在は軽度の障がいのある子どもたちの指導が課題となっておりますが、それ以前より、学習障がいのある子どもたちへのご指導や乳幼児のご研究に従事され、またご指導にもご理解が深く、子どもたちへの教育に対する温かい眼差が、そのご研究や実践書、生き方に貫かれていらっしゃいます。

特に先生が着目されている視点として、人間関係があります。長い間、障害児教育分野においては、子どものために周囲の大人が頑張るという風潮があり、いわば子ども中心主義の考え方が主流でした。しかしながら、先生は、子どもと大人の人間関係に視点を置かれておられます。何か課題があると、多くの大人は、子どもの問題と捉えますが、実は指導者、支援者を含めた大人の世界の問題であることの方が多く、周囲の大人の人間関係が上手くいくと、子どもの発達はずっと促されていく、という人間の関係性を見る、ひとして大切なことを見通す眼差しに貫かれていらっしゃいます。

通信制大学院で社会人や研究者の多くの先生方が、川村先生を慕い、遠方からでも、再び学びたいと集っておられました。月日を越えても、教え子が指導者となり、全国に輪が広がり、繋がっていることに対し、憧れをもって、拝察させていただきました。

また、先生は、学習意欲、なかでも、子どもたちの内発的動機づけについて、ご講義くださいました。何かご褒美があるから学ぶのではなく、誰かが喜ぶから学ぶのでもない、自分の中から沸々と湧き出る好奇心、学びの意欲を障害のある子どもたちから引き出すことの重要性について、教えてくださいました。

それは障がいのある子どもたちへの教育としてだけではなく、物資に溢れ、競争を強いられるなかで、学ぶことの意欲を見出せなくなっている現代の子どもたちへの教育にも大切なことではないかと考えます。

先生とは3年の短い月日ではありましたが、至らぬ私に対して、細かなことは口出さず、大切なときに、ずっと助けてくださるお人柄でした。障害児教育は教育の原点と語られますが、先生のように長年、障がいのある子どもたちのご研究、専門家の人材育成に尽くされた方は、なんともお優しい温かさが全身から伝わってくるものだと思います。これから先、大学でのご研究に一区切りつけられましても、先生の教えてくださった教育の原点は、多くの子どもたち、教え子、研究者を通じて、生き続けていくことと存じます。

短い間ではありましたが、先生とご一緒させていただいた月日を財産に、これからも将来の特別支援、教育を担う人材育成に尽くしたいと思います。

どうもありがとうございました。